

三小×東京農業大学

田植え

皆で力を合わせてまっすぐ苗を植えました。



三小には約50平方メートルの田んぼがあり、平成30年度より東京農業大学の土地ゼミのご協力・ご指導のもと、5年生が田植えから稲刈り、脱穀、そして実際に食べるところまで行っています。
農学部の上地教授と16名の学生が、もともとあった田んぼを何日もかけて掘り起こし、土をふるいにかけたり、たい肥、土、苗などを持ち込み、田植えまでの準備をしてくれました。

上地ゼミでは、稲栽培における窒素の有効利用について栽培実験をする傍ら、子どもたちへの食育を目的とした「おコメプロジェクト」と称する活動の一環として、ゼミ所属の学生が小学校に出向き、稲作の授業を行っています。今回は教授の研究室に訪問し、上地教授とゼミ生の菅野伸二さんから話を伺いました。



かみじ よしあき
上地 由朗 教授
東京農業大学
農学部
農学科農業生産分野作物学研究室
☆研究テーマ
水稲栽培における合理的窒素管理に関する研究
イネの低環境負荷型栽培技術に関する研究

一稲作を通じて児童に学んで欲しいことー
今の子どもたちは、あまり土いじりをしたことがない子も多くいます。この体験を通して食べ物のありがたみを身をもって感じ、農業や生き物の大切さ、そして命の尊さを知ってくれればと思います。
農業は皆で行うので、子どもたち同士での連帯感が生まれたり、日々、育っていく稲の様子に驚きの感覚を味わうことで、喜怒哀楽などの感情が生まれ、素直な心が育まれていきます。さらに自分で作った米を食べるという経験は児童にとって特別な経験であり、愛着心が生まれ、よりおいしいと感じることが出来ます。また小学校5年生という年代で体験すると、大人に

なっても記憶に深く残り、その後の児童の健やかな心の成長につながっていくと思います。
一学生と児童の関わり合いー
ゼミの学生は授業以外のときも、夏休みに田んぼの様子を見に小学校へ足を運んだり、水の管理をしたり、児童との交流を楽しみながらもお米の大切さや食べることを伝えていきます。児童にとって大学生は、親近感が湧き近い目線で教えてくれる存在です。学生の中だけでも教職を目指す者もいますし、熱心に小学校に足を運んで、児童との交流を深め、その経験を学会で発表する者もいます。現在は16名ほどのゼミ生で年間を通して三小の稲の生長を見守っています。

中学生のころ農業に興味を持ち、高校生のときに実際に体験をする機会があって、農の道を志したという現在4年生の菅野さんは、「子どもたちに何かを教えるという経験は初めてだったので楽しかったです。普段食べているお米に関心を持ってくれる子が多く、やりがいがありました。子ども同士で教え合うなど、工夫しながら作業をやっている姿が印象的でした。田植えのときに田んぼをはだして歩き回るのがとても楽しそうだったり、お米の知識を教えると素直な反応が返ってきたりと、新鮮味があって良い刺激を受けました。今後、子どもたちが将来の道路を決めるときに、この経験を思い出して、農業を選択肢の一つにしてくれる子が一人でもいれば良いな。稲作体験が農への興味、きっかけ作りになれば。」と語ってくださいました。



稲刈り

6月に植えた稲はすっかり大きくなり、いよいよ稲刈りです。児童や東京農業大学の学生さんたちが稲の生長を見に来て、水の管理をしたり、すずめに食べられないようネットを張ったりしました。
稲刈りは、学生さんたちに教えてもらいながら、鎌を持って刈っていきます。皆で協力しながら稲刈りの体験をしました。



天日干し

刈った稲を天日干しにします。10日ほどお日様に当てることでおいしいお米ができます。



脱穀・もみすり

乾燥させた稲の脱穀作業を行いました。東京農業大学から持ってきてくださった脱穀機、もみすり機を実際に使ってみました。



皆で育てたお米を精米して学生さんたちが持ってきてくださいました。
お鍋で炊いて、ついに学生さんたちと一緒に食べました！
自分たちの手で作ったお米はとびっきり美味しかったです!!

